以上、廣い分野にわたる論文をそれぞれ的確に論評することは、守備範圍の狭い評者の能力の到底なし得ぬところであり、いきおい揚げ足取り的な論評に筆が走った。誤解、曲解、見當はずれの箇所も多々あろうかと思われる。御叱正いただければ幸いである。京都大學人文科學研究所の「明清研究班」は本書の刊行を以て活動を終了するという。永年にわたって多くの貴重な成果を生んだ「明清研究班」の活動に改めて敬意を表するとともに、傳統ある共同研究の場が再開される日の近からんことを祈る次第である。

一九八九年三月　京都　京都大學人文科學研究所

A五判　五八二頁

松本英紀譯註
宋敎仁の日記

竹内弘行

『論語』微子篇に、周公の言葉として「備わりたるを一人に求むる無かれ」（また『尙書』君陳篇にもみえる）というのがある。これが『論語』に收められるにあたっては、恐らく孔子も口にしたことがあったからかもしれない。私が、松本英紀氏の『宋敎仁の日記』を手にしてまず頭に浮かんだのは、この『論語』の言葉であった。もちろん、それは、本書が不備だというのではない。現代日本の中國史學者の仕事としては恐らく最上の仕上りをしていて、周公や孔子の言葉にも時には例外があるのではないか、と思ったからである。それ程に、本書『宋敎仁の日記』は、譯文、譯註、解題とも、優れた內容となっている。

これは、私だけの判斷ではない。さきに話題となった『知の帝國主義――オリエンタリズムと中國像――』（一九八八年、平凡社刊）の譯者・佐藤愼一氏は本書の出版直後に、すでに次のような見解を公表されている。

「本書は單なる翻譯書ではない。日記に現れる人物や事件・組織について詳細な譯注が施され、その總計は九二三項目、一五〇ページに及ぶ。そして、この譯注の價値は極めて高い。例えば、日記には五〇〇人を越える中國人と日本人が登場するが、彼らの多くは傳記もない無名の人物であり、譯注の助けを借り

ない限り、日記に書かれたことの「意味」を讀者が理解することは不可能に近い。譯注には文獻根據が明示されているから研究の手引きとしても役立ち、さらに卷末の人名・書名・事項索引と併用すれば、他に類のない中國近代史辭典の機能すら果たす。一〇年を遙かに超える歲月を要して作成されたであろうこの良心的な譯注には、本文と等しいだけの――見方によっては、むしろ本文を凌駕する――價値すらあると思われる。本書は、日本の中國近代史研究の、一つの到達點でもある。」（『朝日ジャーナル』、一九九〇、二、一六）

この文の前には、松本氏の譯文が「正確で、かつ讀みやすい」という指摘もあるが、本書が單なる譯書を越えて「中國近代史辭典」の機能も持ち、譯注が本文を凌駕するという右の指摘に私も同感である。こうした優れた仕事の紹介ができるのも、同學としては果報といえるかもしれない。以下、贅言であることを覺悟で、本書の概要を紹介し、あわせていささか望蜀の言をつらねて、本書がより多くの讀者の目に觸れることの一助になればと思う。

一

本書の原本宋教仁著『我之歷史』全六卷は著者宋教仁の來日する直前、一九〇四年一〇月から、中國革命の全國的な展開を期して東北の滿洲馬賊にオルグをかけるべく鴨綠江から安東入りをした一九〇七年四月まで、その間に一部分缺落はあるものの、全文約一七萬字もの詳細な日記である。本書はその日記の全文を平明な現代日本語に譯し、かつ人物や事項につき詳しい註を附し、さらに全體にわたる「解題」を附けている。いま、全體の構成を目次によって示すと次のようになる。

序文――狹間直樹
序
第一卷　一九〇四年九月・十月・十一月
第二卷　一九〇五年一月・二月・三月・四月・五月・六月・七月・八月・九月
第三卷　一九〇六年一月・二月・三月・四月・五月
第四卷　一九〇六年六月・七月・八月・九月
第五卷　一九〇六年十月・十一月・十二月
第六卷　一九〇七年一月・二月・三月・四月
附錄　中央行政と地方行政の區分
跋
譯註
解題
譯者あとがき
索引

このうち最初の狹間直樹氏の序文以外は、譯者松本英紀氏の手になるものである。序（蔡元培の序一から鳳高翥の序九までに、馮爲鑒の宋教仁の短い傳記を含む）は、民國九年の最初の翻刻本（桃源三育乙種農校本）に附けられていたもので、近年大陸から出版された單行本『宋教仁日記』（一九八〇年、湖南人民出版社）、二冊本『宋教仁集』所收「我之歷史」（一九八一年、中華書局）には收載されていない。譯者の松本氏が指摘するとおり、短い序文ながら、

宋教仁の身近にいた人たちの文章だけに、宋教仁の人となりや事跡を知る上で貴重な證言を提供してくれている。つづく第一から第六までの全六卷が本書の名前にあたる「宋教仁の日記」の部分であるが、原著の書名は『我之歴史』である。

この命名については、宋教仁自身、歴史に對する自己の主體性の確立（原文中には「主觀性」、「爲我主義」、「唯我主義」といった言葉で語られている）を經た上で付られたものであろう。ちなみに、日記の後半は、陽明學や心理學・哲學を勉強しつつ、自己の精神主體を鍛えあげ、同時に神經衰弱症と鬪う、內面的な克服のドラマにもなっている。著者の宋教仁が「我」の歴史と命名した一番の理由は、おそらくここにあったのではないかと思われる。

後の附錄「中央行政と地方行政の區分」、及び跋（彭澤篤）もまた、民國九年の初刊のおり附けられた貴重な資料である。

ところで、本書の松本氏の譯註は、二種類ある。次の譯註の項目で說明されるのは、時に「未詳」の二字ですまされるものもあるが、ほとんどが數百字にわたる詳細なもの。この他にもうひとつ譯文中に〔　〕で示される補註で、これは、原文中の十二支による時刻の表現を、逐一、現代の二十四時閒制による表示に直したり、當時の地名を現代の名稱によって示したりするほか、宋教仁が手にしたり買い入れた書物について、これも逐一、調べ上げてその著者・譯者・出版社・刊行年を註記している。

例えば、一九〇五年七月二三日、宋教仁は、『耶蘇傳』を買った。その書名の下に松本氏はこう註記している。

「ルナン著、綱島梁川譯、東京專門學校出版部刊」（本書、八九頁）

この前後の日記から、宋教仁は牧師と會ってキリスト教に興味を持ったことが知られるが、さらに日本での翻譯書をとおしてより深い知識を得ようとしていた事が、右の註から判明する。

なお、本書の出版に先立って、小松原伴子氏が宋教仁の日記にみられる書物を調査され、大變詳しい「宋教仁讀書目錄（一九〇四～〇七年）」を作成している。それによれば、この『耶蘇傳』には、次の三種があったという。

「ルナン著・綱島梁川譯のもの、ノイマン著・栗原基譯のもの、敎文館刊行のものの三種あり」（『呴沫集』第五集　一九八七年、所收「宋教仁、その青年時代と日本――『我之歴史』に讀書の跡を探りつつ――」、二五〇頁）

松本註がなぜ最初のルナン著・綱島梁川譯のみをあげたのか、その根據が示されておれば、より親切であったかもしれない。ともあれ、書名も人名も事項も卷末に索引があって、辭書としての役目をも果してくれることは有難い。譯者の解題とあとがきは後にふれることもあろう。以上、本書の構成を目次に卽して紹介した。

二

本書『宋教仁の日記』の著者、宋教仁は、湖南省桃源縣に生まれた。幼兒期から青年期にかけての宋教仁については、詳しい資料が殘されていないので不明だが、戊戌變法の翌年すなわち一八九八年、一八歳のとき桃源縣の漳江書院にて勉學し、さらに一九〇三年、二二歳のとき湖北省武昌の文普通學堂に入った。ここで、革命思想に接し、翌年冬には日本へ亡命する。日記は、宋教仁が日本へ向う直前宋教仁ら湖南士人を中心とした革命團體「華興會」の長沙

蜂起が事前に發覺し、官憲の追求をのがれ急據日本へ亡命するという、冒頭からスリリングな逃亡の記錄で始まる。

この一九〇四年は日本では明治三七年にあたり、おりから中國東北・東三省（舊滿洲）を舞臺に日露戰爭が戰われていた。翌一九〇五年にはロシア帝國內に「血の日曜日事件」など社會主義思想の擡頭とロシア革命の出現を暗示する事件も發生し、また東洋の一後進國だった日本が、ロシア帝國との戰いに勝って帝國主義列強の一角に食い込むなど、この年はまさしく二〇世紀の世界史的な轉換の年にあたっていた。宋教仁は、その樣子を亡命地東京にいて毎日、日記に記錄していたのである。この宋教仁の日記の稀有な價値のひとつはここにある。

周知のように、一九〇五年は、中國革命運動史においても、劃期的な年であった。宋教仁の日記にその詳細が誌されているが、孫文の來日で宋教仁や黃興など湖南の「華興會」と革命諸派の間に大同團結がなり、「中國革命同盟會」が成立した。六年後の辛亥革命を射程に入れた革命活動が開始されたのである。

變化のあったのは、革命勢力の側だけではない。滿洲族の王朝である清朝も、この一九〇五年には、科擧を廢止し、憲政の視察の爲に特命五大臣を海外に派遣し、翌一九〇六年九月一日には、西太后により「豫備立憲」の詔が下された。

これらの政府側の動向は、海外の革命家にも大きな影響をあたえた。すでに本書の序文で狹間直樹氏が指摘されるとおり、科擧の廢止は、留學生の爆發的增加となった。特に日本では、日露戰爭が終った頃には八千人にものぼり、それが「爲政者の意圖とまるで反して革命化してしまう」狀況も出現すれば、物見遊山で蕩盡する者も多かった。宋教仁の日記には、同じ留學生仲間から「遊廓」へ行こうと誘われたが斷ったという記錄もある（一九〇六年六月五日）。

一九〇五年一一月には、急增した留學生に對して日本の文部省が「留學生取締り規則」を制定公布した。これに對して中國人留學生は強く反發し、特に湖南省出身で宋教仁の先輩であった陳天華（一八七五―一九〇五）は大森海岸にて抗議の自殺をした。ただ、この前後の宋教仁の日記が缺落していて、詳しいことが判らないのは殘念である。

一九〇六年になると、宋教仁は、名を宋鍊と變えて、官費留學生の資格をとり、早稻田大學清國留學生部豫科に入學した。宋教仁の日記の後半は、この年の生活記錄にあるといっても過言ではない。生活の重心を革命活動から勉學に移して、自己の精神鍛練や持病となった神經衰弱症と闘った。一一月五日からは、宮崎滔天家にて轉地療養もしているが、革命家の內面を、これほど克明に記錄したものを私は寡聞にして知らない。

一九〇六年末、宋教仁のもとに湖南の醴陵、江西の萍・瀏兩地方において革命黨が蜂起したとのニュースが傳わる。一時、勢力を得た起義軍も翌一九〇七年には平定され、つづいて犧牲となった同志の訃報や逮捕された仲間の知らせに接し、宋教仁はその對應に追われる一方、新しい革命の展開を期して滿洲馬賊との接觸を圖るべく日本を離れる。彼の日記はこの年四月九日の記錄と馬賊あての檄文をもって終っている。

その後の宋教仁は、日本へ再び戻って章炳麟や日本人北一輝らと革命活動を續けるが、一九一〇年一二月末に歸國し、中部同盟會を組織して武昌起義を準備した。これらについては、本書の譯者松本

英紀氏の勞作「中部同盟會と辛亥革命――宋教仁の革命方策――」（小野川秀美・島田虔次編『辛亥革命の研究』一九七八年、筑摩書房）に讓ろう。

民國成立後の宋教仁が、國民黨を結成し、議會をとおして大總統袁世凱を掣肘せんと目論みながら、一九一三年三月二〇日、上海驛にて凶彈に倒れ、わずか三二歳で逝去したのは周知のとおりだ。

辛亥革命の研究は、今日では孫文を中心に大變さかんであるが、今や中國史學者だけでなく、日本史や近鄰諸國關係史や社會主義思想史といった分野からも研究の觸手がのびている。本書『宋教仁の日記』は、そうした狀況にも對應できる第一級の資料であるといってよい。

三

譯者松本氏の譯文についてもふれておく必要があろう。松本氏は、「譯者あとがき」で、故三田村泰助氏の勸めで、宋教仁『我之歷史』の翻譯を決意され、すでに一九七五年より『立命館文學』誌上に連載されてきたものを、その後も改訂・增訂を施して、本書の刊行となったと言われる。本書に費された時間が、並たいていの量でなかったことは、言うまでもなかろう。

ところで、松本氏は、譯文について同じ「譯者あとがき」の中で、「少々、直譯的な文章にしたのは、譯者の、日記の文體をそのまま生かそうとした意圖によるものである」と斷っている。宋教仁の日記の文體は、中國が近代になって轉換を餘儀なくされた古典漢文體であり、來日後、語彙に日本語や歐文がまじることはあっても、格調は變わらなかった。その點では、梁啓超の文章のような閒のびした翻譯臭がない。松本氏は、その點をふまえて、日本語としてはやや堅めの直譯的な文章に移されたのだが、それが時代がかった漢文訓讀調になっていない點は、まず指摘しておきたい。むしろ、內容によっては、思いきった意譯を試みて、宋教仁の意のあるところをダイレクトに示してみせる。

例えば、一九〇六年三月一八日の日記にこういう話がある。宋教仁は、女友達の西村千代子に會いに行った。西村千代子というのは、中國人留學生に好意的な西村年一という日本人の娘で、この年の一月七日の日記に始めて登場し、宋教仁と（末永節と千代子の妹の四人で）活動寫眞を見に行っている。だがこの日既に、李和生という同じ湖南桃源出身の留學生仲閒から「西村の女と會うべきでなかった」と責められている。ちなみに、この李和生は、前年末に宋教仁に『陽明全集』を買って心を治め身を修めることを重んずるよう勸めた人物である（一九〇六年一〇月七日）。のみならず、宋教仁とは特別に親しい關係にあった。週に一度は宿を共にするという約束だったのだ（同年二月二二日）。しかも、二人とも日記をつけていて、相互に見せては批判しあう仲でもあった（同年六月一一日と三月一九日には、相手の方の下宿に行って勝手にその日記をみたとある）。宋教仁と李和生の閒に新しく日本人の未婚女性西村千代子が介在し、三月はじめには、彼女の案內で王子製紙を見學、同月一一日の夜には、宋教仁は李和生に「西村の娘を愛している」と告白するに至った。

當然のことながら、李和生は嚴しく宋教仁を批判し、逆に宋教仁は「美女を見ると好きになる、これは心理上の自然の本能である」と應じた。以降、宋教仁の日記には李和生、吳紹先といった同鄕の

留學生と激しい非難と辯護の應酬をくり返した。その最中の三月一八日、宋教仁は、當の西村家に赴きしばらく門前でウロウロしたのち内に入った。たまたま父親の年一が不在で千代子が出てきて、親しくもてなしてくれた。そう書いた後に、日記の原文には「坐良久、千代子言笑在若有情之間」とあり、私は以前からこの部分の現代語譯を何とすべきか、頭をかかえていた。松本氏は、これをスッキリと次のように譯されている。

「しばらくして、千代子が笑いながら『變な考えを懷いているのではないの！』といった。」（本書、一五五頁）

この夜も李和生が來て、激しく宋教仁を非難したのは言うまでもない。二人の衝突は、この半年後の李和生の歸國までつづくが、宋教仁と西村千代子との仲は、この一箇月後、宋教仁が一方的に會わないようにして終っている。宋教仁が本當に「變な考えを懷いて」いたのかどうかは、直接本書をひもといて判斷していただいた方がよいかと思う。

もっとも、松本氏の譯文が原文を生かしているからといって時には、疑問がないでもない。例えば、一九〇五年九月一九日、宋教仁は同志の黄興と會い雜誌『二十世紀之支那』を同盟會の機關誌に改める件で、次のように告げられた。

「《二十世紀之支那》は昨日〇會で舊名を使用せず、別に雜誌を出すことにして、いっさいの關係は表面上すべて斷ち切ることにした。〇會は〔《二十世紀之支那》が〕排外主義を主張することで人々の嫌忌を引き起こすことを望まないからである云云」（原文「《二十世紀之支那》、前日〇會議決不用原名、擬別出一報、一切關係、表面概與斷絶、以〇會不欲持排外主義啓人嫌忌也云云」。傍點は竹内による。以下同じ。本書、一〇九頁）

松本氏は、文中に「排外主義」とある點に次のような註を附けている。

「排外主義とは今日流にいえば、反帝國主義を意味する。《二十世紀之支那》が排外主義云々とは具體的にさきの發禁處分を受けたことを指すのであろう。またこうした發言をしたのは誰からか明らかでないが、新しく機關紙を發行することを提案したのは孫文であった（『胡漢民自傳』傳記文學出版社、一七頁、及び『國父年譜』增訂本、上册、一九九～二〇〇頁）。」（本書、四四二頁）

原文に「排外主義」とあるのをそのまま譯文に用いて、それを「反帝國主義」とよみ變えるのは、一九〇〇年の義和團の排外主義や、廿一箇條要求に對する排日運動などと通じるからであろうが、しかし、原文ではそれほど大きな意味でなく、私は今日風にいえば「セクト主義」のことではないかと思う。

同盟會が宋教仁ら湖南出身者の華興會、孫文ら廣東出身者の興中會、浙江出身者の光復會など革命諸團體の大同團結で成立したことは周知のとおりだ。從って、その機關誌が華興會のそれの舊名《二十世紀之支那》を殘しておれば、かえってセクト主義を殘存させることになり、會員の團結にひびの入るのを避けがたい。從って、當面の課題は、大同團結を阻げる要因の除去にあったとみる方が妥當するように思われる。

これより前、華興會の内部では同盟會への加入をめぐり次のような意見の對立があったという。陳天華は贊成、黄興は形式上連合し、精神的には華興會を存續させる二面作戰、劉林生は反對の立場

をそれぞれとり各自の主張がまとまらず、宋教仁は結局「個人の自由」でよいとしている（一九〇五年七月二九日）。他の會派も似たような狀況にあったことと思われる。だとすれば、新しい機關誌に舊名を殘して、他會派を刺激すべきではない、というのが、孫文ら同盟會推進派の意向ととるべきではないか。ここは私は同盟會ならびにその機關誌の誕生をめぐる微妙なかけひきの一面を讀む部分であるように思う。もっとも、これは、譯文の問題というより、資料解釋の問題であるかもしれない。

四

本書が譯書とはいえ時間をかけ工夫をこらして書き上げられた優れた作品であり、學界に多大の寄與をなすものであろうことは、既に何度もふれた。しかし、譯者の勞苦を十分認めた上で、あえて「毛を吹いて疵を求め」るとすれば、以下のような點もあるので附記しておきたい。

(1) 本書の譯註に、上海に作られた宋教仁の墓には、「片手に書物をかかえ、片手は頰を支えて冥想にふける坐狀の石像（本書插入の寫眞を參照）があり」（三八三頁）と說明されているが、本書の中には、「留學時代の宋教仁」と「宋教仁の生家」の寫眞しか收載されていない。何かの事情でカットされたものであろうが、ちょっと殘念だ。本書全體に言えることだがもう少しビジュアルな資料が加えられれば、活字だけの註釋に色を添えることができたように思う。

(2) 譯語の中で氣付いた事だが、原文に「前日」とあるところを、すべて「一昨日」と譯してある。現代中國語ではその通りだが、古典では「先日」の意味で、一昨日でもそれ以前を指す場合でも使っている。宋教仁が一九〇六年三月二一日に留學仲間の吳紹先に出した手紙で「前日誤解愛色之義」とあるのは、拙文でさきにふれた宋教仁が西村千代子を見そめて「美女を見ると好きになる（原文「見美色而愛之」）、これは心理上の自然の本能である」と論じた三月一一日のこと。一昨日だと三月一九日になり、この日は、吳紹先から、この宋教仁の西村千代子をめぐる愛色發言を批判した手紙を受けとった日になる。從って、「一昨日は女性を愛すという意味を取り違えていた」（一五九頁）と譯されているのは正確とはいえないだろう。

(3) 逆に原文が同じでありながら、譯語が變えてある場合で氣になった事。

A. 一九〇五年三月二一日、原文「（余不知）毋我負人之義」
B. 一九〇六年二月二七日、原文「（待人）寧人負我毋我負人」
C. 一九〇六年九月一日、原文「（學）寧人負我毋我負人之法」

こう並記すると、宋教仁の生活上のモットーが傍點部の「寧ろ人が我に負くとも、我は人に負く毋かれ」というにあったのではないかと思われる。

だとすると譯文で、A「人の好意にそむいてはならない道理」（五四頁）、B「人に負擔をかけさせるより自分が負擔した方がよい」（一四三頁）、C「むしろ人がわたしを背くとも、わたしが人に背いてはならないという道理」（二二四頁）とあるのは、丁寧に譯し分けて、かえって宋教仁の本意を讀者に見誤らせるように思われるがどうだろうか。

(4) 宋教仁が、中國（漢）民族の祖として黃帝を重視し、中國獨

自の紀年法に黄帝即位元年より數える方法を主張していた事は日記に何度もみえる。一九〇五年一月二六日、彼は自分たちの雜誌『二十世紀之支那』にこの黄帝の肖像を掲げて、自から題詞を作った。その中に「使吾世世子孫有噉飲之所兮、昔(皆)賴帝之櫛風而沐雨」という句があって、譯文では「吾が世世子孫をして噉飯う所を有しめ、昔は帝の櫛風を賴りて沐雨す」(三九頁)としている。原文中「昔」を「皆」とするのは校注本であり、『二十世紀之支那』雜誌の題詞もそうなっている。ここはテキストクリテークとして一言註記してほしいところだ。

ところで、右の原文に「櫛風而沐雨」とあるのは、もと『莊子』天下篇にかの禹王が洪水を治めるにあたり「沐甚雨、櫛疾風」(甚雨に沐し、疾風に櫛る)の苦難を重ねたとあるところから轉じて、王業を定める意味になった。例えば『唐書』狄仁傑傳には「文皇帝(唐太宗李世民)櫛風沐雨、冒野鏑以定天下」という。從って、この黄帝の場合も、前に「大刀と闊斧とを藉りて、以て九有を奠定す」とあるのだから、「吾が世世子孫をして噉飯う所あらしむるは、皆(あるいは昔)帝(黄帝)の櫛風し沐雨する(勞苦)に賴る」と讀むところであろう。だから「四萬萬の同胞」にその祖黄帝を忘るなかれと主張されているのだ。ここは、宋教仁の意識を端的に示している重要な部分であると思われるので、あえて指摘しておきたい。

冒頭に、『論語』にみえる周公の言葉「備わりたるを一人に求むる無かれ」を引用して實によく備わっていると本書の優れていることを言ったが、もとより五百頁を越える大作に手落ちの一つや二つはあって當然だと思われる。右に、本書を精讀しながら氣付いた「疵」數點を列擧したが、全體から見ればほんの些細な事で、本書の價値をいささかも損なうものではない。

評者に宋教仁の日記の面白さを教示して下さったのも、實は松本英紀氏であり、以來、何度か『我之歷史』を讀んだ。その學恩もさることながら、本書の譯註の中に未公刊の愚論の紹介までして下さった氏の眞摯で謙虛な姿勢には、頭の下がる思いがする。この拙い評が、誤解にもとづかなければ幸いであるが、「譯者あとがき」で松本氏自身が「こん度はいよいよわたしの宋教仁論を展開せねばならない」と言っておられるので、次なる氏の宋教仁論の完成を樂しみに待ちたいと思う。

一九八九年一二月　京都　同朋舍出版
A五判　五六八頁　一八〇〇〇圓